

仮想ストーリー「3」作/古民島根を楽しく語る会

卑弥呼の鏡に映った 古代の島根

輝く出雲コクの終焉と新たな出発

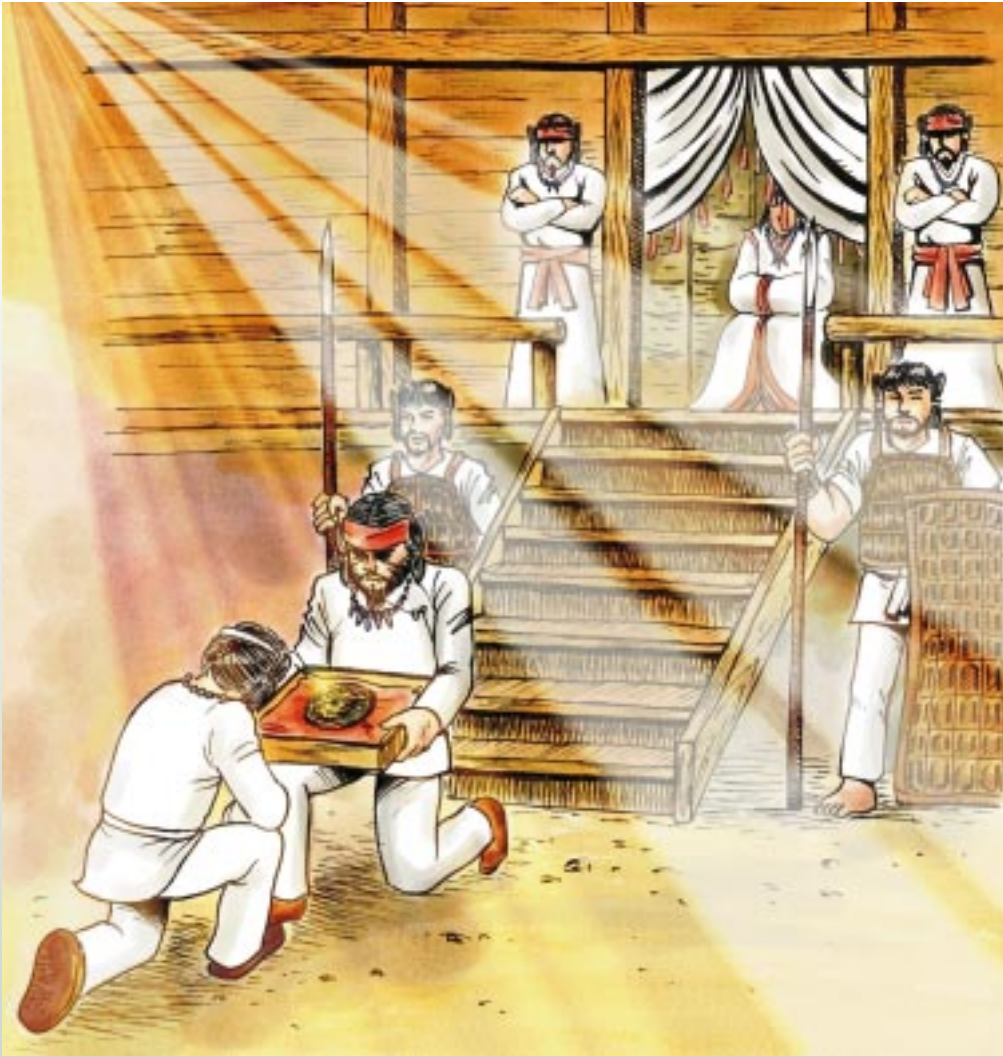
消えゆく出雲コク王・西谷
 出雲コクの最大派閥として君臨してきた「西谷」が、なぜ近畿地方の諸国をまとめて生まれたクニ、大和コク連合の力に屈することになったのか。その理由の一つは、「安来」が大和コク連合についたことだが、もう一つの鍵を握ったのが、西谷の里を流れる斐伊川の上流にいた「神原」(現在の加茂町)と「三屋」(現在の三刀屋町)だった。彼らは当時、地方の一小豪族であり、西谷があるかぎりけつして出雲コクを中心の座につくことはできなかった。それに目をつけた大和コク連合が、強大な武力を背景に彼らに接近してきたとき、彼らは考えた。「もう世はずで出雲コク同盟の時代ではない。ここで大和コク連合につくのが得策だ」と。



出雲もついついの新興勢力・三屋
 一方三屋では、全長50メートルという巨大な古墳が、三刀屋川沿いの丘陵に現れた。島根に暮らす人びとはその大きさに驚嘆すると同時に、明らかに世代が変わったことを感じた。
 出雲コク最大のムラ・西谷の滅亡に、加茂の神原と並んで大きく貢献したのが、三屋の豪族だった。神原が西

神原と三屋は、西谷との連合から離脱を決意した。そして大和コク連合の軍勢力を背景に、西谷へ降伏を迫ったのである。
 安来をはじめ、近郷の豪族たちまでが大和コク連合側にまわった。かつての出雲コク王には、もはや逆らう力は残されていなかった。出雲栄光の時代に輝いた西谷は、こうして静かに消えていった……。

「卑弥呼の鏡」を手にした神原
 神原の豪族の館にある宝物殿には、一枚の鏡が、銀色のまばゆいばかりの輝きを見せながら納まっていた。
 早くから出雲西谷に見切りをつけて大和コク連合側についた神原は、西谷を滅亡させるうえで大きな役割を果たした。宝物殿の中に納まっていたのは、彼の働きに対して卑弥呼から与えられた鏡である。女王・卑弥呼は、大和コク連合の支配に組み込まれたクニに対し、同盟のあか



しとして鏡を配っていたのだ。配られたのはただ一枚であるが、その鏡を持つことは、大和コク連合、という強い後ろだてを持つことを意味していた。
 この鏡こそ、かつて卑弥呼が中国の魏の皇帝からもらい受けた、銅鏡一〇〇枚の一つであった。卑弥呼はこの鏡を、国内の統治の手段として利用していたのである。出雲コク時代には一小豪族にすぎなかった神原も、「卑弥呼の鏡」を手にし、西谷の監視役としてこの地域を治める豪族に躍進したのであった。

谷征伐の報酬として卑弥呼の鏡をもらったように、三屋は古墳を造ることを許されたのである。
 四隅突出型墳丘墓を造り、そこに葬られる者だけが王であった出雲の地に、初めてそれ以外の墓が現れた。古墳と呼ばれるこの巨大な塚を造ることができる人、それは大和コク連合との強いつながりを持つ者に限られていた。出雲コク同盟の象徴・四隅突出型墳丘墓の時代が終り、大和コク連合の象徴・古墳の時代がやってきたのであった。その出雲における先駆けが、三屋だったのだ。
 大和コク連合は全国制覇を成し遂げ、「大和政権」となった。この全国制覇は、力に頼るだけのものではなかった。神原や三屋のような新興勢力を鏡や古墳を利用して配下につけるといって、巧妙な外交手段を用いて進められたのであった。

墓の規格品時代が始まる

大和政権の拠点、大和に呼ばれた安来、神原、三屋の王たちは、そこに造られた巨大な古墳を見て目を丸くした。まるで二つの山を重ねたような大きさ、そして斜面一帯には形が整えられた石がすき間なく積み重ねられ、古墳の上には、筒状の埴輪が整然と並び立っている。
 大和盆地には全国各地から数万人もの人が集められ、大王の墓を造営している。墓のまわりは労働者たちでこった返し、住居が建ち並び、さながら大都市の街並みのごとくである。まさに全国制覇を成し遂げた大王の墓にふさわしい、壮大な墓造りの光景であった。

出雲からはるばるやってきた王たちは顔を見合わせ、自分たちもあんな古墳を造りたいと考えていた。しかしその考えがいかに甘いものであったか、大王の館で開かれた戦勝記念パーティの席で、夢はもうくも崩れ落ちたのである。
 大王は、各クニの王たちの前でももむろに言った。
 「いま進軍中の墓、あれが私の墓である。あの墓を造ることができるとは、私の許しを得たものだけだ。勝手に造ることは許さぬ」



安来平野の丘陵に、新しい時代を象徴する古墳が築かれた。古墳のある丘の向かい側には、かつて日本海を奔放に活躍していた古き良き時代の王たちの墓、四隅突出型墳丘墓が静かに横たわっていた。

そして、今までの実績や働きに応じてどんな古墳を造るのが、各地方の王たちに指示が下された。早くから大和政権側についた王たちは、大王と同じ形の墓、前方後円墳、その次の位置づけられる王の墓は、前方後方墳、そして「円墳」、最後が四角形の「方墳」である。
 今まで各地方の王たちが自分たちのルールに従って造ってきた墓を、大和政権は統一し、大王の采配で古墳造りを認めるといふルールを作ったのである。まさに古墳は、王の墓という以上に、地方の王たちの地位をあらわすための「階級章」だったのである。
 大王は安来の王に言った。
 「あなたたちは、最後までわれわれの側につかなかった。たしかに最後は西谷を見限って、わが陣営にはいった。その功績は、認めてやる。しかし最高位の前方後円墳なんでもつてのほか、方墳を造る権利を与えよう」
 かつて出雲コク同盟時代には、自分より力の弱かった三屋が前方後方墳をもらったのだ。「古豪安来は、いちばん立派な前方後円墳がもらえるかもしれない」という期待を抱いていただけに、方墳しかもえなかつたというショックは大きかった。
 出雲コク同盟が滅びた今となっては、古豪安来も大和政権に逆らうことはできなかつた。安来王は今後、大和政権の支配下に置かれる、単なる一地方の王となつたのだ。
 安来平野の丘陵に、新しい時代を象徴する古墳が築かれた。古墳のある丘の向かい側には、かつて日本海を奔放に活躍していた古き良き時代の王たちの墓、四隅突出型墳丘墓が静かに横たわっていた。